

「自立」するということとは

学校教育スタッフ 指導主事 福島 淳次

先日、江津市の今井美術館で開催されている金澤翔子展に行きました。金澤翔子さんは、ダウン症ですが、書道の世界で活躍されている方です。テレビに出演されたり、NHK大河ドラマの題字を手掛けていたりしたこともあり、ご存知の方も多いのではないかと思えます。美術館には、多くの作品が展示されていました。力強くダイナミックな書もあれば、まるで絵を描いているような書もあり、翔子さんの全ての作品に魅了されました。

翔子さんは、5歳から母の師事で書を始められました。漢字が難しかったり、母の指導（説明の意味）がなかなか伝わらなかったりすることもありましたが、実際に体を使って体験しながら、翔子さんのペースで上達していきました。泣きながら書くこともありましたが、「母に喜んでもらいたい」「達成感を味わいたい」といった気持ちから、続けてきたそうです。今では、文字通り全国を飛び回り、多くの人々の前で作品を書き、多くの人々と触れ合っておられます。翔子さんの写真や映像を見ると、なんと楽しそうに、なんと生き生きとしておられるのだろうと感じます。翔子さんのこの姿は、まさに「自立」ではないでしょうか。

「自立」とはよく聞かれる言葉で、「他の助けや支配なしに自分一人の力で物事を行うこと。ひとりだち。独立」といった意味で使われます。対して、小・中学校の特別支援学級や通級による指導における自立活動での目指すところの「自立」は「児童生徒がそれぞれの障害の状態や発達の段階等に応じて、主体的に自己の力を可能な限り発揮し、よりよく生きていこうとすること」を意味しています。これは、書道の世界で自分の力を発揮し、いつも笑顔で多くの方と接し、生き生きとしている翔子さんの姿と重なるように感じます。

障がいがある人の自立を考えると、全てを助けなしに一人でできるようになることを求めるのではなく、「ある道具を使えば一人でできる」「環境を整えばみんなとできる」といった捉え方が必要です。また、発達の進んでいる側面をさらに伸ばすことも大切です。それは、全ての側面の発達を促し、主体的な活動をしていくことにつながるからです。

美術館には、金澤翔子さんが母にあてた手紙が展示してありました。その手紙からは「お母さま大好き」「感謝」「これからの生活への期待」などの翔子さんの思いが伝わってきました。展示会に行って、子どもたちへの「自立」のために何が大切なのか教えられた一日でした。

益田広域特別支援連携協議会 研修会のお知らせ

- 期日：平成30年2月23日（金）14：45～17：00（予定）
 - 講師：河村 暁（かわむら さとる）先生
（広島で「発達ルームそら」という民間支援機関を主宰）
 - 内容：講演「ワーキングメモリーと学習支援」
 - 場所：益田合同庁舎 大会議室（5F）
- ※詳細、参加申し込みについては、後日、ご案内いたします。
多くの方々のご参加をお待ちしています。

社会教育主事として忘れないでいたいこと

津和野町教育委員会 派遣社会教育主事 佐々木 将光

4月から社会教育主事として勤務し、あっという間に半年が過ぎました。「社会教育主事ってどんなことするの？」年度初めに会う人からよくこんな質問を受けました。それならわかるのですが、中には「佐々木さんって社会の先生だったんだ。」という笑い話のような質問を受けることも。ですが、決して笑い話ではなく、私自身、恥ずかしながら社会教育主事って何するのと尋ねられたときに、はっきりと答えられるものを持ち合わせていませんでした。「社会の中で多様な主体によって行われる教育目標を持った組織的な教育活動が社会教育です。それを支援したりするのが社会教育主事です。」と伝えて、「なるほど！」と納得した人を見たことはありません。モヤモヤしながら日々過ごしていく中で、ある公民館主事さんがこんなことを言われました。

統廃合により学校が地域からなくなってしまった時、「このままでは地域が寂れてしまう。何とかしなければ。」という思いで、地域住民に色々なはたらきかけをしてきたの。でも、「自分にはできないことはない。」「学校が遠くなったけえ、行きにくくなったわあ。」と皆さんが口をそろえて言われるの。何とかしなければという私の思いになかなか賛同してくれる人は少なく…。そうこうしているうちに、地域住民のモチベーションが下がっていき、これまで続けてきた行事もついになくなってしまっただけでね。「どんな事業をすればみんなが参加してくれるのか。」「どうすれば学校とつながることができるのか。」いろいろなしかけを考えてはみるものの、なかなか思うようにいかず、愚痴のように“こんなまちにしたいよね。こんなことできると楽しいよね。”と、いろいろなところで語って回る日々。ところが、その話を聞いた人たちが、「だったらこんなこともできるぞ。」「それならわしが頼んでみるよ。」と話が大いに盛り上がり、気がつけばなくなってしまっていた行事が復活し、子どもからお年寄りまでが集い、活気あふれる場になっていったのよ。

一度はなくなってしまった行事が復活するに至ったのは、熱心に働きかけをした主事さんの思いや行動力の成果だけでなく、地域住民の多くが“こんなまちにしたい”という夢を語り合い、共有することができたからではないでしょうか。「だれかがしてくれる」という他人事だったものが、たった一人の描いた夢によって「自分事」になり、さらには、その自分事集団が「我々事（地域力）」として大きく動き出すことになるのを肌で感じ、“これだ！”とモヤモヤが晴れた瞬間でした。と同時にこんな言葉を思い出しました。「社会教育主事って共鳴者なんだよ。」津和野町の教育の発展に長く携わってくださった学社融合研究所（栃木県鹿沼市）代表の故越田幸洋さんが6月に津和野町にお越しになった際に新人の私に贈ってくださった最期のアドバイスです。地域の方の“こんな津和野にしたい”という思いを受け止めて、言葉や形にして響き返すとともに、津和野町民一人一人の心に届けることが社会教育主事の役割だと考えています。そのためには、まず私自身も常に夢を描き続け、町民の皆さんの思いを広く受け止め、共感し共鳴し続けていくことを忘れないでいたいと思います。